

俳諧山田部  
第八〇號  
百川  
志冊  
白鷗莊

027  
291  
/

八仙觀墨友跋  
全

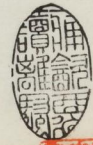


027  
291  
1

交知女專  
第11501號  
圖書



序



假名の碑、墨をあらまむ事、東山墨を以て小  
大正より今三月十二日を以て蕉門より好雅  
人、日雙林寺のほと集り、池子會武乃松、まき、  
さ、祖翁毛、何難ありて、誼釋をかこし、先師の  
維、あり、一脈をきもつ、柳、後園、ま、大功、ま、  
存、我師、や、廿年、の、む、浴、ま、任、終、ひ、百、何、佛、小  
荷、擔、雪、自、花、乃、交、き、り、と、も、中、比、より、濱、萩、の

秘錦の旗幟一て先師の遺跡を頼りてありしか  
難波もも位うりつねと過し年位昔れ八仙觀を停り  
下全盛り鶴の成を化し果くまも舊友乃塚を笑ふ  
就中古翁の五十回三毛難波を通志乃人くもあら  
されと一善二善乃志の三幸よこり墨筆以供  
養て翁乃追福とせりかきすや年く乃墨筆  
よ青苔緑竹乃古いを拂ひて茶人の物敷奇よと  
六寸碑銘の四時煙墨乃新すんよは行西行よ

不道三也をいひすきありて郭るも岩倉乃復在を  
えなれ蕎麥切も本曾れ出店をかまて宮吉の靈  
意をやすんせんに祖翁の懐け志よ主人我の  
少侍のいりよたよ子とを

本牛見

延喜二  
三月十二日

師冬再拜



法蓮

揮墨の義々  
筆勢を發く

八仙五人

我筆を石に八たり墨を紙に

世上に巧く詠り撰も 一丸

此のつきり雲雀乃新の塵降て 杜吾

坐して八墨ぬ何やう也 彭星

才而取ら出ると暖簾毛帆に吹乾 李仙

秋衣と赤川に快く笑々のる 麥五

名月乃丸に毛保て十三夜 桂剛

星のまぬは合字心經 仙行

朱襖乃中さる人毛かくまらふ 師冬

寶の首りかけて甘白 川

何買亦順慶所をうらぐ也 丸

光陰乃箭毛師走朝 吾

曆よ八里日とあれや雪りぬ乾 里

虚言も十人並の仲媒 仙

まきく此意衣とハ端子論子

五

壬生うゝ烟をこさる時道

洲

二  
海棠ハさ即ハ海に眠りり

行

か市と日南の家へ出らる

冬

かけ羽子のちりちり帰る新毛や

風五

け度むまゝ時ハ大各

芦角

牛房喰へ酒の先起て食もくへ

川

何りハちりちり山ハ三つちり

丸

珠散々け呼へん雁とて楳の杖

岳

たおとりて長以象鼻

里

持てまて化もやまハ小豆まち

仙

さねくと降てとと照る

五

棠内もたハ寸 鏡川 新衣唐門

洲

犯秋も出ると雪復出らる

行

棒とけ小口日 正月ハ月落宙

冬

猪ふくと草の量れ 風

風

名

浪人も角力の争ふは負れれと 角

鼻て顔出をも伽羅のうせ抱 川

三弦りつはて時斗もくひを交 丸

裏門すれも伴達いどうえす 吾

蕎麦切も俳諧も今花さるこ 角上

曠野冬乃日永き春の日 重寛

并角屋

一座一章 并文通

仙行

其雲も花乃すけや普賢像 李仙

そのいへと散らるは赤り山さくら 桂剛

入相り人ハちるまひ山さや花 一丸

礼りも本竟りりな祭や下楯

梅花佛の澄燈  
墨多胡一々

苔り香のこもや梅の花佛 今

初雪もももとくちもや山さくら 芦角

伊勢さくらちきや国阿の高本履 彭里

志とひて石得よ指

春三月あれと試自や算の陰 麥五

ちる花よ糸きつから仏々念佛系 重寛

雨ときて星の帯々ちる 椿 杜吾

碑前よ二章とありく  
亡翁の翁ひともと心

灸点ハ二月を人のすまみ 兔士

蝶とんて跡ハよきよ 墨書跡 芳礎

黠亦を寸筆と筆墨乃落々木 楓架

蝶身毛出まきく滞々花乃雲 曾夫

大川まりと様ハ志ろ 墨書跡 於兔

かき流の毛跡くかハく雲並 帆車

一順身はくくむなび寸蛙可南 枇杷

花毛謎解くなすや谷乃水 巴水

花ハまゝの種を成くハや長永寺 隠向

花より滞まきく公三ハ夜古や墨を車 楚丁

なる時乃花よ音あるはときし々 何聲  
 蜂ハ巢よ深えこよやまきなひし々 茶什  
 西山乃雪乃名残や梅乃花三州 伊仲  
 佛よいちりゆきもあ々 むえ乃たふ々 馬茨  
 九重を伊達乃うま弟や山桜障 麦籬  
 千年の莖ハ里日野 山休くら 野竹

四季限詠

あを彫よ名の連横川のほときす 角上  
 小三とれや弟よて暮乃夕あうえ 枳毫  
 むえ候と雪よも聲や谷の水 希因  
 竹乃子ハくれぬ女殺呼も梅花 免士  
 青柳や二節三まち老木乃り 柳居  
 藤夜よ隈とせきり毒乃花 百川  
 ゆく春やえ返る藤の水かき 養士







かまはうに見方ふりの野暮イセ 玄燈

三月月の形もさうにけしイセ 左雀

佐保お免の乞目よはくや梅の心イセ 已蝶

灌佛や朽へる所 草の倉根イセ 八調

葉さくらの膝を紙あり衣イセ 糸雨

孝名よ 甚し

を備くりのそらも城の一構イセ 温故

三味線乃顔をもむら坂也イセ 柀如

傘はまゝの答なりそ山大坂 志く礼 風五

まゝ摘ぬ茶も水さすや春の雨カ 芦丸

佐保ひめの尻をきくや花の心イセ 茶付

迹もふも危き秋の胡蝶イセ 冠上

松風乃夜や月あまる年のみちイセ 志山

際あけて夕日よすもや山の色仙谷 漁舟

ときれし時雨の間は寒念佛吉田 只川

西陣ハ織々あそぬや夕の菊イセ 朴子

渦蓋の顔出す旅戸祭う家 師冬  
 散る時り糸い切連より蓮の花 十二庵  
 差水や一夜よまき一富士の跡 松髭  
 初とつ岩のほく雨やまろけよハ 菊峯  
 山くよ出さくる雲れあつさうふ 旧山  
 遠火や姫も物々ましく雲のう 吳風  
 眺らハ 隙をとり 遊ぶくら 芦角  
 眼のとくく山の鼻あり苔藓のむ 風耳

日の園よあをひて  
 年の名を惜む

りし手の戸側おそ一車道 八仙親  
 引のりさ春日や晴のさくら 浪 仙行  
 火をとほす梅や雪乃花曇 玉く  
 ハ朔や福も誇よ 風の音 怪杏  
 真の辛を覚えてや月も十三夜 北堂  
 名月も池の香ひや蒲むらう 素道  
 あり〜に 豎横尺せよ布う 啓 重実

大ッ  
 松髭  
 菊峯  
 仙カ  
 旧山  
 吳風  
 芦角  
 風耳  
 八仙親  
 仙行  
 玉く  
 怪杏  
 北堂  
 素道  
 重実

徳

山の赤砂はたまきその馬の言雀の家 中は 好和

うくむすや名物の霜の夕の照 入 何有

紅梅や病僧分岐嶺の雲 長り十 梨星

谷月や藍毛二番の花より 去音

朝魚も膏ハ角あり二日の月 雲蝶

冬の日秋濂を詠一室も曉糸 八仙並

夫尚糸

雪の糸は数借く紅のまつりふ 希因

拙灯は梅をきりすや清麴舟 百川

岬々船出守萩や星むりへ 々

瓢箪に後生乃持やとらきま 々

除夜

梅の音に浪をよるつ 氷の糸 々



ふすの三本七町  
井田を庄兵衛  
長り十

